

日名子太郎著

保育学序説

福村出版・一九六六

最近は、幼児保育関係のすぐれた書物が、つきつぎに出版されるが、この書物もその中の一つである。幼児保育の諸問題について、諸種の資料を引用しながら論じてあり、概論書としても使用できる。とくに施設の管理、運営については詳細な論述があり、本書の特色をなしているといえよう。ひろく保育関係者におすすめしたい。本書の第一章は、「保育と保育学」と題して、従来よりその定義の明瞭でなかった、幼児教育と幼児保育について諸説を参照しながらその異同を明らかにしている。そして、児童福祉法関係では、保育という言葉をも、教育を除外して考えているが、乳幼児の場合には対象からくる必然性として、教

育的要素がふくまれてくることを指摘し、幼稚園の場合、保育という言葉と、教育という言葉で完全には置換できないとしている。「それは、幼稚園が、学校教育法の規定による教育を行なっているからとの理由から、故意に、保育を教育という言葉でおき換え、保育という言葉と、幼稚園関係から抹消しようとする」(P.5) 傾向に反対の意を述べ、幼児教育よりも幼児保育の方がふさわしいとしている。そして「今日の教育意識過剰の幼稚園教育が、いかに人格形成の面で、幼児に弊害を与えているか」(P.17) を論じている。これは耳を傾けるべきことばである。さらに、保育学の必要性について述べ、保育を科学的に基礎づけ、組織づけるという保育学的、「既成の諸科学の交流点に成立すべき新しい科学的分野である」(P.28) と述べている。私も保育学はこれから発達すべき分野であると思うし、幼児教育学というよりも広汎な、人間科学の一分野として成立するものであると思う。

第二章「保育と社会」第三章「保育環境」第四章「保育者」の各章においては、社会学

的資料を豊富に引用してあっておもしろい。第七章「保育方法」は、著者の考え方がよくまとめられていて、勉強になる。第八章「保育評価」は簡潔にすぎ、評価そのものの考え方にふれてほしかったと思う。もちろん、この書物は、序説であるから、今後、もっと円熟発展されるであろうし、その時を待ちたい。第九章「保育施設の管理、運営」は、この面で経験の深い学者である著者でなければ、よく記すことのできないのであろう。豊富な資料が示されている。

著者の幼児保育論を通して、その底に流れる著者の児童観には目をとめる必要がある。「一人の精神薄弱児が自分の組の中にいることによって、他の子どもにも迷惑を及ぼすからと拒否する保母、たしかに多人数の幼児を一人の保母で保育しては、そのようにいわざるを得ないかも知れない。それならば、一人の保母の保育する児童の数を制限することによって問題は解決する。これが為されていないのは、児童の一人一人を尊重していないからに他ならない」(P.54) と断言される著者の心意に敬意を表したい。